#26

ヤマビコメが嗤(わら)う日には

著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「ちょっと、そこどいて」
「んあ？」
背後から不意にした声に、コウキは食べかけのおにぎりを頬張ったまま、ゆっくりと振り返る。
そこには勝ち気そうな赤毛の少女が立っていた。
健康的に焼けた小麦色の肌ときっと結ばれた唇。そして凛とした光を宿した瞳。
それらすべてが少女の真っ直ぐで力強い意志を示していた。
コウキのごつく引き締まった身体とはまた別種の、柔らかく無駄のない筋肉がついているのが着衣の上からでも容易に判る。
「どいて」
少女はちょっと苛立った様子で繰り返した。
人ひとりがやっと通れる程度の狭い、山の獣道である。
確かにコウキがどかなければ少女は先に進めないだろう。
コウキはちょっと考えてから、指に残ったご飯粒をぺろりと舐めた。
「この先の森にはヤマビコメが出る。見つかったら、ただじゃ済まないぞ？」
「大丈夫よ。だってあたし、そいつから美咲を取り返しに来たんだから」
「取り返しに？」

「そう。だからそこ、どいて」
しばしの逡巡の後、コウキは言われるがまま、半身を横にして僅かながら少女が通れるスペースを作ってやった。
「ありがと」
少女は短く礼を言って、そのまま獣道の奥の森へと走っていった。
すれ違う時、微かに甘い香りがコウキの傍に漂った。
山の木々が風にザザと葉を鳴らす。
「百年ぶりかな……」
少女の背中を見送りながら、コウキは呟いた。
「この俺が見える人間なんて……」

◆

「ヤマビコメ、出てこーい！」
赤毛の少女――美剣桜花――は森に向かって叫んでいた。
さきほどの少年・コウキがいた場所から10分ばかり走ったところである。
獣道の終着点には直径20メートルほどの空き地があり、それを取り囲むように背の高い木々

が鬱蒼と生い茂っていた。
昼間のはずなのに、辺りは夕闇に包まれたかのように薄暗い。
「こらー！　ヤマビコメ、出てこいったら出てこーい！　美咲を返せー！」
「うるさいのう、妾ならさっきからここにおるぞ？」
「……！」
いつの間にか桜花の5メートルほど前にぼんやりとした光の玉が浮かんでいた。
ぼうっとしていながらも、はっきりしたその光は、桜花に縁日で並ぶ提灯のそれを連想させた。
そしてその光の中には妖艶な笑みを浮かべた女が物憂げな所作で横たわっていた。
女は煙管から吸い出した紫煙を気怠げそうに吐き出して、じっと桜花を見つめている。
着崩した和服の胸元からは豊かな双丘がちらりと覗いていた。
「美咲を返せ！」
「みさき？　はて、なんのことかの？」
ヤマビコメは煙管をとん、と膝で叩いた。煙管の火皿から灰が落ちる。
「とぼけるな！　お前が先週、神隠しに合わせたあたしの親友だ！」
「おうおう、あのオボコ娘か。あの娘の魂は美味じゃったのう～」
「……！　おまえ、まさか！」

桜花の刺すような視線が、ヤマビコメを貫いた。
「お～怖い怖い。そのような目で見られてはかなわぬのう。体の震えが止まらぬわ。安心せい、あの娘はちゃんと生きておるよ」
ヤマビコメはおどけるようにそう言って、新しい刻み煙草を火皿に詰め、指先から出した炎でそれに火を点けた。
「……美咲を返せ」
押し殺した声で、桜花は繰り返す。
「返してもよいが……それは妾に勝ったらじゃ」
ヤマビコメはゆっくりと紫煙をくゆらせている。
「……判ってる」
桜花の脳裏に、むかし祖母が教えてくれた話が甦る。
鎮守の森の奥の奥には山彦女が棲んでいる。
その妖怪はまるで山彦のように人間の真似をする。
そしてすべてを真似しつくされた人間は、最後にその魂を喰われてしまうのだと……。
そんな恐ろしい妖怪が、今、まさに桜花の前にいる。
桜花はともすると逃げ出したくなる気持ちを抑え込んで、敢えて毅然とした表情でヤマビコ

メを睨みつけた。
それから彼女はつま先立ちになり、両手をあげてその指先を頭上で優雅にそっと合わせた。
「あんたにこれが真似できるかしら？」
桜花は挑戦的な目でヤマビコメを誘う。
対するヤマビコメもうっすらと笑みを浮かべながら、すでに桜花と同じように頭上で指先を合わせている。

真似死合はすでに始まっているのだ。

タン、と桜花が軽やかなステップを踏んだ。
そしてそのまま流れるような動きで跳躍し、両足を前後に開脚してから交差させる。
アン・ドゥオールからグラン・パドゥシャ。
それは桜花が得意とするバレエのステップだった。
桜花は小さい頃から両親にバレエを仕込まれ、コンクールで何度も優勝するような実力者だった。ことバレエに関しては誰にも負けない自信があった。
桜花のしなやかな四肢が華麗に跳躍し、舞い、躍動する。
それはまるで風に踊る白鳥のように優雅だった。

（ふふん、どうかしら？　たかが妖怪ごときがあたしのステップについてこれるわけな……）
しかし眼前のヤマビコメを見て、桜花は言葉を失った。
その「妖怪ごとき」が完全に桜花のステップを真似していたからだ。
それこそ寸分の狂いもなく、まるで鏡に映したかのように、正確に。
（そんな……そんなはずはないわ！）
桜花の表情に焦りの色が浮かんだ。
今まで同世代の人間には誰一人負けたことがなかった。
それは彼女の圧倒的な身体能力が、他の踊り手のそれを凌駕していたからだ。
そのあたしのステップを、こいつは完全に真似している。
あり得ない……そんなことあり得るはずがない！
桜花は突き動かされるかのように、次々とステップの難易度をあげていく。
ピルエット、フェッテ、ピケ、ステーニュ、シェネ……。
桜花の身体は、まるで羽根が生えたかのように飛び、舞い、躍る。
これだけの高度な技を、次々と繰り出せるのは日本にも何人もいない。
コンクールの舞台であれば、ここでスタンディングオベーションがあってもおかしくないレベルだ。
（これで……これでどう!?）

桜花がヤマビコメの方をちらりと盗み見た。
しかしそこには平然と桜花の真似を続けるヤマビコメの姿があった。
しかもヤマビコメは息ひとつ乱さずに、笑みを浮かべながら桜花の真似をしている。
対する桜花は額に汗を浮かべ、その表情には苦悶の色が滲み始めていた。
明らかに自分の実力を超えたステップを踏み続けた反動が来ていた。
もう、限界が近い。
「あっ……！」
何度目かのフェッテのあと、桜花は着地に失敗し、足首を捻ってしまった。
そしてそのままバランスを崩し、地面に伏せってしまう。
立ち上がろうとしても足首が発する鋭い痛みがそれを許してはくれなかった。
（立たなきゃ……このままじゃ美咲が……！）
「もう終わりかえ？」
桜花の頭上から声がした。
見上げるとそこには冷徹な笑みを浮かべ、桜花を見下ろすヤマビコメの姿があった。
その瞳には捕食者特有の、冷たい光が浮かんでいる。
瞬間、桜花は自分の運命を悟り、底なしの闇に落ち込んでいくかのような絶望的な気持ちになった。

（ごめん、美咲……あたし、こいつに喰われちゃう……ごめん……あたし、美咲を助けられなかった……）
「ならばそなたの魂は妾の物に……」
「待ちな」
突然、凛とした少年の声がした。
ヤマビコメがあわてて声の主を捜そうと首を巡らす。
やがて彼女は、獣道の横の大きな岩の上で、もしゃもしゃとおにぎりを頬張っている少年の姿を認めた。
「あなた、さっきの……」
地面に伏せったままの桜花が呟く。
「ここで見させてもらってたけどな……」
両手をズボンのポケットに入れたまま、コウキは岩の上からすっと飛んで地面に降り立った。
「お前、なにひとつこの娘の真似なんて出来てなかったぜ？」
「え？」
コウキの意外な言葉に桜花がきょとんとした顔でコウキを見上げる。
「は、何を愚にもつかぬことを……」
ヤマビコメはバカバカしい、とばかりに頭を振った。

「妾はこの小娘の舞を完璧に真似したぞ？　それはこの小娘が一番判っておることじゃろう？　のう？」
「っ……」
ヤマビコメの言葉に桜花は唇を噛んだ。
確かに自分のステップが完全に真似されてしまったことは、桜花自身が痛いほど良く判っていたからだ。
10年以上血の滲むような練習を続けて、やっと自分の物に出来た数々のステップを……この妖怪は、初見で、いとも簡単に……。
「なら証明してやろうか？　おまえ、今度は俺の真似をしてみろよ」
コウキは挑発するようにヤマビコメにそう言い放った。
「ほお、面白い。それにしても今日はついておるの。馬鹿な人間を二人も喰える」
ヤマビコメは舌なめずりをしながらにんまりと微笑んだ。
「あの、あなた……」
「まあまあ。いいからそこで見てろって」
桜花の呼びかけを軽くいなし、コウキはポケットからスマホを取り出した。
何やら操作すると、そこから大音量で曲が流れ始める。
「これって……」

桜花は目を丸くした。なぜならそれは、桜花も良く知っている曲だったからだ。
そう、それは……。

【腕を前から上にあげて大きく背伸びの運動～♪】

日本国民全員お馴染み、ラジオ体操第一の曲だった。
ちゃ～んちゃか、ちゃかちゃか♪　ちゃ～んちゃか、ちゃかちゃか♪
という小気味よいメロディとリズムが、場違いなぐらい大きく、森に反響している。
そしてコウキはすでに曲に合わせて張り切って体操を開始していた。
「貴様、一体どういうつもりじゃ……？　妾をバカにしておるのか？」
ラジオ体操のあまりに単調な動きに戸惑った様子を見せつつも、ヤマビコメはしっかりとコウキの真似をしていた。
先ほどと同じく、寸分の狂いもなく、まるで鏡に映したように、正確に。
二人が向かい合って真剣にラジオ体操する様子は、傍目にはちょっとシュールな絵面だった。
「ぷっ……くく……」
ラジオ体操第二に入ってから、桜花は自分の置かれた状況も忘れ、思わず吹き出してしまった。

そう、ラジオ体操第二は変な動きの体操が多いのだ。
それを二人が向かい合って真剣にやっているので、どう見てもコントにしか見えない。
特に「腕と足を曲げ伸ばす運動」の中に出てくる、おっさんのような「どっこいしょポーズ」は桜花のツボだった。
「あ、あははは！　な、なにそのおじさんくさい動き……あは、あははははは！」
「わ、笑うでない、小娘！　これが終わったら真っ先に貴様から喰ろうてやるから覚悟しておけ！」
心なしか頬を朱に染めたヤマビコメが早口で桜花を威嚇する。
その間もラジオ体操は着々と続いていた。

【はい、大きく手を上げて深く息を吸って吐きま～す♪】

コウキは深く深ーく深呼吸をすると、地面に置いていたスマホを拾って曲を止めた。
「ふ～、やっぱりラジオ体操はいいな。身も心も晴れ晴れする。ここ数百年では一番良い人間の発明だな」
うんうんと頷きながら、コウキはいかにも「やり遂げたぞ」という満足の表情を浮かべた。
対するヤマビコメは勝ち誇った顔でコウキに告げる。

「ふ、貴様の体操も完璧に真似しきったぞ。さあ、妾に魂を……」
「おまえ、俺が右手を上げた時、どっちの手を上げた？」
「なに？」
突然コウキから問われたヤマビコメが面食らったような表情を浮かべる。
「『体を横に曲げる運動』の時、俺が右手を上げたら、おまえは左手をあげたな？　それはどうしてだ？　真似するならちゃんと右手を上げないとおかしいだろう？」
「そ、そんなの決まっておろう！　鏡に映せば右と左が入れ替わることぐらい、その辺の童子でも知っていることじゃ！」
「じゃ、なんで上と下は入れ替わらないんだ？」
「なに!?」
コウキの追及にヤマビコメは絶句した。
確かに鏡では左右は反転するが、上下は反転しない。
そしてその理由をヤマビコメは全く説明できなかった。
「なんで左右は入れ替わるのに、上下は入れ替わらないんだって訊いてるんだよ。それはおかしいだろ？」
「そ、それは……」
ヤマビコメは答えに窮した。

コウキの疑問があまりにも当然で、しかもヤマビコメはそれに応える術を持っていなかった。
「つまりお前は自分の都合で勝手に左右だけ反転して真似してたってわけだ」
「ぐっ……そ、それはつまり、つまり……」
「そんなものは完全な真似じゃない。そうだろう？」
「そ、それはじゃな……それはじゃな……」
「結論から言えば、お前は今までただの一人も正確に真似できてなかったってことだ。この娘も含めてな」
「あ、あああ？　あああああ？　妾は誰の真似もできていなかったじゃと!?　そんな、そんなバカなことがあああ～～～～!!」
自分の存在理由を根本から覆されたヤマビコメは激しく狼狽えた。
そして次の瞬間。

ボンッ

ヤマビコメは爆発した。
爆発の煙が晴れると、そこには力を失い、幼女化してしまったヤマビコメの姿があった。
「そんなことはないのじゃー！　わらわはちゃんとまねをしたのじゃー！　まねをしてきたの

じゃー！」
ヤマビコメ（4歳）は地面の上でじたばたと手足を動かした。
まるっきり駄々っ子だった。
「だからおまえたちのたましいをわらわによこすのじゃー！　よこすのじゃー！」
「今まで真似が出来ていなかったことを認めたから、その姿になったんだろ？」
「ちがうのじゃー！　ちがうのじゃー！　う……うわあああああん！」
コウキの容赦ない追及に、ヤマビコメはついに泣き出した。
「ばかばかばかばかばか、おまえのかあさん、でべそーなのじゃー！　へそがちゃをわかすのじゃー！」
言っていることも支離滅裂になってきた。
その時。
「ヒコメちゃんをいじめちゃダメー！」
森の奥から黒髪の少女が飛び出してきた。
少女はヤマビコメに駆け寄ると、その小さな身体をぎゅっと抱き締めた。
「ヒコメちゃんは人間とお友達になりたいだけなんだよ！　だからずっと人間の真似をして、人間のことを知ろうとしてたんだよ！」
「うわあああああん、みさきぃー！　あいつらじゃー！　あいつらがわらわをいじめるの

じゃー！」
「よーしよし、怖かったねー、ヒコメちゃん。……あれ？」
「美咲!?」
「桜花ちゃん!?」
森から飛び出てきたのが美咲だと判って、桜花は驚きに目を丸くする。
「良かった、美咲！　無事だったのね!?　1週間も行方不明になってたから、あたし、もう心配で心配で……」
「え？　1週間？　あたしさっきヒコメちゃんとお友達になったばっかりなんだけど……」
美咲はきょとんとした表情になった。
どうやらこの森の中は現世と時間の進み方が違うようだ。
「あ、そうだ！　桜花ちゃんもヒコメちゃんとお友達になってあげてよ！」
「え？」
とてもいいことを思いついた、という表情で、美咲が嬉々として桜花にそう提案した。
「そうしてくれたらヒコメちゃんも嬉しいよね？　ね？」
「あうう、そ、それは……」
ヤマビコメはバツの悪そうな顔をして、美咲の背中に隠れてしまう。
「本当は桜花ちゃんともお友達になりたかったんでしょ？　だから真似したんでしょ？」

「あうう……」
ヤマビコメは美咲のスカートをぎゅっとつかんだまま、頬を真っ赤にしてうつむいた。
「ほら、ちゃんと言わないと桜花ちゃんに伝わらないよ」
「……わ、わらわとおともだちになってください……」
美咲に促されて、ヤマビコメはスカートの陰から半分だけ顔を出して囁くようにそう言った。
「ぷっ」
そのあまりの可愛さに、桜花は毒気を抜かれたような気持ちになった。
「いいよ、美咲と一緒にあたしもお友達になってあげるよ」
「ほんとうか！」
ヤマビコメの顔が喜びにぱっと輝いた。
「やくそくじゃぞ!?　やくそくじゃぞ!?　あとでやっぱりなしとかなしじゃぞ!?」
「あはははは、そんなことしないよ」
桜花は笑いながら、ヤマビコメと指切りげんまんをしてやった。
「わーいわーい！　おともだちができたのじゃ！　ふたりもできたのじゃ！　なにしてあそぶ？　なにしてあそぶ？」
「さっきまであんなにしょげてたのに現金だなあ……あれ？」
桜花はコウキの姿がないことに気がついた。

「美咲、さっきまでここにいた男の子知らない？　助けてくれたお礼をしなきゃ」
「男の子？　なんのこと？　ここには最初から桜花ちゃんしかいなかったけど？」
「え？」
桜花は改めて辺りをぐるりを見回した。
そしてそこにコウキの姿はどこにもなかったのだった。

◆

「確かにいい色の魂だ……」
コウキはむしゃりとおにぎりを頬張った。
今は、高い高い一本杉の上から桜花たちをじっと見下ろしている。
「本当におまえが俺を使役する者として相応しいかどうか、じっくり見極めさせてもらうとするかな……なんせ百年ぶりの『俺が見える』人間だからな」
コウキ――奇魂綱鬼――はそう呟いてから、指についたご飯粒をぺろりと舐め、その姿を消した。

おしまい